

会報

25. 26号



函館の歴史的風土を守る会会報
 №25・26 合併号 S 62・3・25
 発行所 函館の歴史的風土を守る会
 事務局 函館市五稜郭町4-3-9
 五稜郭タワー株式会社内
 電話 (0138) 51-4785
 印刷所 双葉印刷 ☎ 53-7730番

第9回 函館の町並みを語る新春チャリティ・パーティで
 歴風文化賞の発表と贈呈式をしました。

函館の原風景として「石垣のある街」



宣言文

西部には永年の年月、風雪に耐え、歴史を語りかけてくれるさまざまな顔、そして親しみのある石垣が、建物、坂道などによりそってふれることができます。これらの美しいコントラストは、永遠に函館西部地区の誇りであり、街並みに潤いを与えてくれます。

ここに歴風文化賞に値するものとして宣言します。

かつて
 人間が創ったあらゆるものが
 朽ち果てたというのに
 亀甲に積まれた石垣だけが
 砦のように黒く聳えていた

人間のいなくなった
 石垣のある街に来てみた

時代のおくなくなった勇者の声や
 慎ましく交し合ったささめきが
 雑草を揺すぶって聴こえる
 砦はものを云わない
 亀裂から流れ出た水の筋を
 積み石の数をなぞり落下する。

人間の創った美しい石垣のある街
 今、比処は確かに人間のいる街
 陽光が、今こそ暖かさを当てる時
 函館に住むことの 幸い

中村 玲子

第4回歴風文化賞 保存建築物3件



← 永全寺

函館市昭和2丁目21-45
齋藤大全殿

貴、永全寺。納骨堂は函館市台町（現。船見町）に明治18年、函館検疫所。隔離室として建てられ、それは洋館建築の特徴を加味した貴重な建築物であります。昭和44年、現在地に再現保存されており、その努力に謹んで感謝の意を表します。

小 熊 邸 →

函館市元町32-10

小 熊 徹 殿

貴邸は、昭和3年に建てられた函館では数少ない独自の洋風の貴重な木造建築物であります。

60年にならんとするその維持保全に尽され、函館市西部地区の街並みに潤いを与えています。その努力に謹んで感謝の意を表します。



← 渡 辺 邸

函館市元町15-28

渡 辺 靖 夫 殿

貴邸は、大正10年に建てられた函館の洋風建築物として、今日に伝える貴重な歴史的建築物であります。長年、その維持保全に尽され、函館市西部地区の街並みに潤いを与えています。

その努力に謹んで感謝の意を表します。



再生保存建築物 2件

美容室 おしゃれ館

函館市宝来町23-4

小野政司殿

大正10年頃、建てられた鉄筋コンクリートブロック造の公衆浴場を、昭和初期の銀座街の繁栄再生のため昭和61年に美容室おしゃれ館を開業、美的コミュニティーとして与えた影響は大きく、その努力に謹んで敬意を表します。



↑ 高田屋嘉兵資料館

函館市末広町13-22

田中マサエ殿

函館の開港時に建てた倉庫は歴史的な建築物であります。函館といえば高田屋嘉兵衛といわれた、その偉大な業績を偲ぶ資料館としてこれを再生開設されたことは、貴重な文化遺産の活用であり、影響は大きく、その努力に謹んで敬意を表します。

歴風文化賞選考基準

- ① 建物自体の貴重性。
- ② 持ち主が長年保存への努力を続けている。
- ③ 景観への寄与。
- ④ 歴史性。
- ⑤ 地域の町並みや社会全般へ波及効果が大い。
- ⑥ 諸々の制約の中で創意工夫が顕著である。

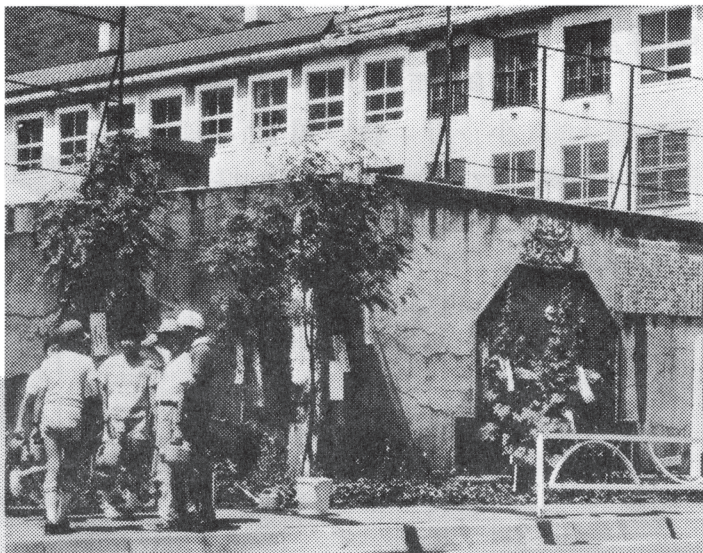
歴史的風土の形成に寄与する団体として 「やぐるまの会」

団 体

- 1. 函館市立 青柳小学校
函館市青柳町22-13

「やぐるまの会」

『命の大切さを学ぶために花を育てる』運動が、地域活性化の、みちしるべとなることに大きな期待が寄せられています。あなた方のこのすばらしい努力に、謹んで敬意を表します。



- 青柳の花 矢車の花
- 慈愛の花 矢車の花
- 心 の 花 永遠の花

受賞者代表挨拶

青柳小学校矢車会 代表 5年(11才) 松村 志保
5年(11才) 中江日奈子

「函館の青柳町こそかなしけれ 友の恋歌 矢ぐるまの花」

私達矢車会をほめて下さったことに心からお礼申し上げます。受賞者で一番小さい私達ですが立派な仕事をされた皆様にかわってお話します。

私達は青柳小学校のお兄さん、お姉さんが三年前から学校や町の道端に矢車の花やオシロイバナやペチュニアの花などを植えて函館の街をきれいにする仕事を手伝い引き継いで来ました。

昨年は矢車の花一万二千本、マリーゴールド二千本、オシロイバナ一千本、ペチュニア五百本、その他エゾギク、カッコウアザミなど一万八千本余りを青柳町・宝来町・末広町、などの沿道に育てたり、電車道路のボックスに植えて市民の皆さんから「とてもきれいに

なったね。」道路を散歩するのが楽しみになりました。」と言われるようになりました。そんな時はとても嬉しかったです。今年は浅利先生とまたいっしょになって世界中の美しい矢車の花の種類を育て、函館の街をもっともっと矢車の花でいっぱいにし、日本一の矢車の花の里にしたいとハリキっています。

今は雪が消えてからすぐ咲く寒咲花菜の苗を電車道路の花壇ボックスに植えようと二万本育てています。どうかこのチビッコの矢車会をこれからも応援してください。今日はとても嬉しいです。会場の皆さんほんとうに有難うございます。みんなで函館の街を立派にしていきたいと思います。

「歴風会に期待すること」

副実行委員長 河内 昌子

第9回チャリティーパーティーに、副実行委員長という立場で参加させていただき、大変勉強になりました。前日、景観条例発足の為の準備委員会もでき、歴風会の今後の活躍が期待される意義ある会でした。

函館は素晴らしい自然と由緒正しい歴史的建築物に恵まれています。歴風会が保存や再生の為に力をそそいでこられた事は、市民の意識高揚に役立ったと思います。私達はさらにこれらの大切な文化遺産から歴史を自分達の教訓として学び、生かしていかななくてはなりません。その為には、今後、街づくりに積極的に参加し、新しく造られる建築物にも目をむけていく必要があると思います。先日の歴風会主催で室先生の「ヨーロッパの街並み」についてのお話や写真はとても参考になりました。西ヨーロッパの人々が、雰囲気を壊

す様な異質の物をつくらず、調和を重んじ、がんこに街をまもって来たという事でした。市壁(城壁)のもとで共同生活をしていた歴史が、ヨーロッパの人々に協調性を育てたのでしょうか。歴風会はずぐれた人材に恵まれた団体です。まず函館の中心となって、街づくりへの理念は勿論のこと、色彩、デザイン等具体的問題にとりくむ機関をつくってほしいと思います。それには行政や市会議員、マスコミの協力が必要ですので、おねがいしたいと思います。街づくりにかける市民運動のもり上りがよい意味での自然の圧力となって、行政から大工さんにまで行きわたるようになったら、函館の街づくりは成功すると思います。歴風会のみなさん、それから今後集う心を同じくする仲間、微力ながら応援したいと思います。(函館元町クラブ)

光と音の夜のスペクタクル

五稜郭野外劇の夢

運営委員 佐渡谷 安津雄

今年の歴風会「新春チャリティーパーティー」は函館の未来に新しい風を吹き込む画期的内容を創りだしました。実行委員長グロード神父は夢と希望に溢れる函館の街づくりの提案を行い会場はその熱気に包まれた。それは一見、無謀な夢と一笑にふされそうだが、会場の熱気は限りない夢への賛同の意がこめられていた。理由は、市民の心の結集により一大文化運動の提唱であり、文化遺産の活用、街づくりへの無限の資源は人間の知恵であることへの訴えであったからだと思う。昨年の文化活動の特徴を見ると第九合唱(団員500名、観賞者5,000名)市民創作ミュージカル「アゲイン」(出演者100名、観賞者3,600名)等の成功、演劇観賞会、2ステージの実現をはじめとする市民文化創造活動の著しい高まりと拡がりが見られる「冬フェスティバル」や「夏まつり」の新しい企画と創造、道南各地で村おこしのイベントの増加、道南100人衆の結集に見られる青年達の情熱とエネルギーの噴出 etc、そこには自由で豊かな心を育くみ誇

りに満ちた生き方を求める姿が確かなものとして存在している。これらがあつたからこそ野外劇実現の可能性は十分に信じられる筈だ。そして野外劇を通して受け継ぐべき精神を歴史から学びとり、函館ルネッサンスへの道程が実現できたらどんなに素晴らしい事であろう。五稜郭を舞台にした夜の野外劇は国の特別史跡をいかした新しい観光資源の創造となり、函館山夜景と双壁をなす夜のスペクタクルとし、その意義は大きく、国内屈指の観光資源となるやも知れない。将来それによって少なからぬ利益を生み史跡等の環境整備、奉行所の復元、文化活動、経済活動への貢献は可能である。この点についてはグロード神父も力説された。最後に今回の夢の提言は夫々独自の活動を続けてきた函館日仏協会・五稜郭祭り実行委員会・函館の歴史的風土を守る会・三者の共同の成果であつた。その意義は大きい。

(函館日仏協会事務局長)

函館ナショナル・トラストを語る会事務局長)

平和公園「五稜郭」

新春チャリティー実行委員長 フィリップ・グロード

広島・長崎は原爆の犠牲となった街であったために、世界的に知られている平和の都、平和を訴える集いの最もふさわしい舞台になっている。

函館の五稜郭も戊辰戦争のクライマックスとその終焉の要塞となっただけに、今の日本、特に現在の北海道の最もふさわしい平和公園になるべき土地であると思う。歴史的遺跡を守るためには効果的に利用すべきで

あり、その教訓を活かすことである。幸いなことにこの星型の要塞は非常に保存状態が良い。ヨーロッパでも稀にみるヴォーバン型の要塞で、その堀にはなみなみと水が溢えられている。その上近い将来、五稜郭の奉行所が復元される。それ故に歴史からみても場所と

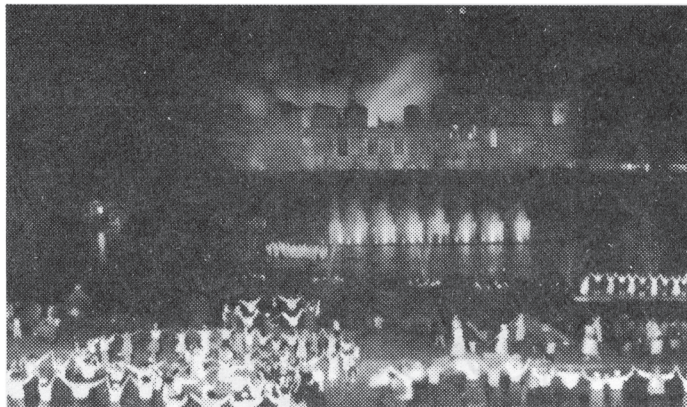
しても日本では五稜郭はユニークな存在である。この見事な観光資源を活かすためにいろいろ考えられるが、まず四料もある堀に噴水を設けることが考えられる。五角型の星を噴水と照明と音楽を合わせて北海道のシンボルにしようや。天に星……と云われるが「北海道には地にも星」をキャッチフレーズにしてさ。ウエルサイユの噴水は有名で毎年観光客を呼び集めている。将来、五稜郭の噴水もそれくらい人気ものになれる。設備をしておけば噴水をあげられる季節は春から秋までである。その期間入場料をとっていくと将来ウエルサイユの噴水のように設備のために投資した資本は戻ってくる。それどころかペイすると思う。噴水の街函館、海に囲まれている函館も水の都になれるぞ。更に五稜郭の祭を充実しつつ夏にはいろいろなイベントも設けられる。

噴水に囲まれた舞台において、各所で仮面舞踊会を催し、五角形の星の先端から気球を上げ、そこからレーザー光線で夜の空に夢を描いていく。五稜郭の歴史、あるいは北海道の生活とその将来をナレーターを通して語りつけ、あちこちに夜の魔法をいっぱい利用していくつかの時代もの、また将来をいざなう場面を照明効果をもって、あちらこちらを突然見せる。かと思

えば突然もとの暗闇に戻す。夜の暗闇はショーでよく使う暗転を無料でしてくれるんだもの。更に飲みものコーナー、食べものコーナーももちろん欠かせないものであろう。

函館全体でアイデアを出し力を合わせて五稜郭のイベントを推進するならば、日本でもオリジナルな垢ぬけした夕べができる。人が集るぞ！ 交通整理のためには明治維新時代の衣裳を着た沢山のボランティアも必要。現在、函館でも港祭りがあるけれど、より個性的な五稜郭のイベントを成功させるためには巾広いボランティア運動をおこなわなければならない。

去年、この将来の五稜郭のイベントのために



ドウ・ピディフの野外劇

ヒントになるかと考えて、函館日佛協会の方々と一緒にフランスの私の故郷で成功している、ドウ・ピディフの野外劇を観に行っただ。いくつかの農村で、フランス革命の時に破壊されたルネッサンス時代の城を舞台にして、素人による夜の野外劇を発足させた。このスペクタクルはヨーロッパ中の人気ものになった。年に20数回、夏の間ずっと上演している。スタッフは、1,600人、実際に舞台に出る人は1,000人近くにもなっている。馬が50数頭も走っている。お城の前の沼の水で噴水、水上での踊りなどなどのショーを楽しませている。このドウ・ピディフのスペクタクルはフランスの代表的なショーとなり、アメリカでも有名になっている。

先日フランスからドウ・ピディフのスタッフの方が函館にいらして五稜郭の公園をみて羨しい、と云われた。ここは素晴らしいイベントをつくり上げる条件が揃っている。ドウ・ピディフのスペクタクルのおかげでその地方の田舎は非常に豊かになった。おそらく五稜郭にも宝が眠っている。ドウ・ピディフのスペクタクルと五稜郭のフェスティバルとで姉妹関係を結ぶ話もあり、一層愉快的な国際交流にもなるのではないだろうか。

西ヨーロッパの町並み

室 富 夫

ヨーロッパ旅行はこれまでに11回を数え、なかでも4回に及ぶ自転車旅行は、ヨーロッパを知る上でまたとない体験であった。西ヨーロッパを中心に多くの町を訪れ、美しい町並みや建築物を写真に納めた。

西ヨーロッパといっても、地理的、政治的、文化的区分ではそれぞれに異なる。宗教的にみれば少しばかり東側にずれるともいえる。東欧、南欧、北欧、中部ヨーロッパ、旧イギリスと区分した場合、狭い意味での西ヨーロッパとは中部ヨーロッパに相当するといえよう。

ヨーロッパでは日本でいうところの市町村の概念は稀薄で、フランスのコミューン、ドイツのゲマインデ、イタリアのコムーネというように自治体・共同体と考えている。ローマ市はコムーネ・デ・ローマなのである。スイスには約3,200、フランスには3,700ほどの自治体があり、1人も住んでいない状態でもコムーネの数に含めており、いつかは住むかもしれないとして残されている。地方自治が盛んなことは言語についてもいえるわけで、標準語が通じないことさえある。そして、どの町も個性があり誇り高い。誇りは自己顕示を強くしている。たとえば、ドイツのハノーファーの庁舎内には、町の模型が三基展示されている。ひとつは大戦前の、もうひとつは大戦中の、最後のひとつは現在のハノーファーの町の模型である。そのうち大戦前と現在のとはほぼ同じなのである。戦争による破壊から立ち直った姿、復元された町の姿を誇示しているのである。

むかしアルプス以北は大森林であった。しかし現在の森林面積は、フランスで国土の22%、西ドイツは30%、日本は65%である。思い起せば、戦後まもない時期に船上から眺めた五島列島は、まるで海に浮ぶマリモのようであった。日本の緑の豊かさを示して



白い外壁がつづくトーンの町（オランダ）

いる。現在のヨーロッパの森は、雨量の関係もあってそれほど深みはない。ウィーンの森は、ガイドに言われて気がつくほどの、実は大した森ではないのである。森林資源が豊富であった時代には木造建築も多かった。特に北部に多く、郷愁を込めてその当時の建物が残されている。フランスにも木組みの建物がある。ノルマン人の影響であろう。ドイツでもオランダでも建物は実によく手入れされている。西ドイツのチュービンゲンのマーケットプラザなどは印象深い。市の中心に大きな広場があり、その広場に面して大聖堂や市庁舎がならんでいる。町の人々はそうした建物を大切にすると共に、広場の空間を取り囲む建物を一体化し、町並みの保存に関心を持っている。



広場を囲む建物 シエナ（イタリア）

イタリアのヴェネチアにこんな話がある。ヴェネチアには三種類の人間がいる。観光客とイタリア人とそしてヴェネチア人である。このような感覚には大いに興味をそそられる。

ベルギーやオランダで特に感じたことであるが、町中の屋根の色が同じなのである。屋根材となる石が近くで取れるとすれば、だれもがその石を利用する。同じ材料だから同じ色になる、他所から別の材を持ってきて別の屋根にしようとするればそれは可能なのであるが、そのような事を考えたり実行したりはしない。そのところが人々の考え方の特徴である。オランダのトーンの町は白い建物が美しい。レンガの壁に白いペンキを絶えず塗っている。町中の建物が白一色で、それを維持しようと、いつもどこかでペンキを塗っている。

町並みづくりは、戦乱で破壊された町を全市的規模で復元する大がかりなものから、小さな町の人々が自分の家にペンキを塗って美観を守ろうとしていることまで、さまざまな形で行われているのである。



'87はこだて冬フェスティバル
— 日本文化の源流 —

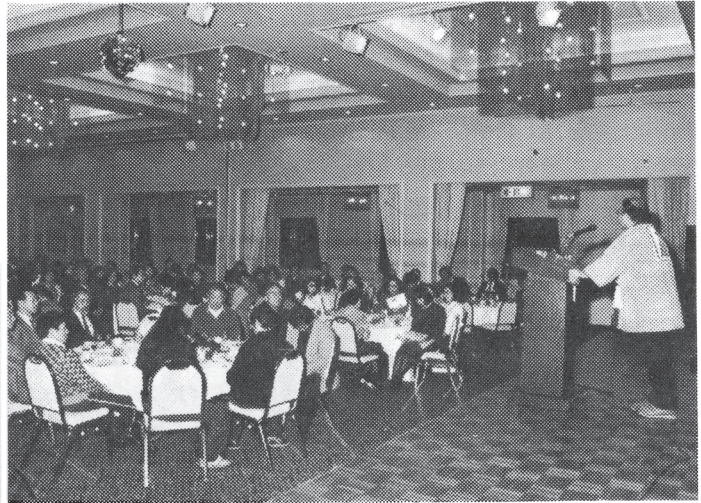
シルクロードの調べPART2

主催：函館ナショナルトラストを語る会 協賛：はこだて冬のイベント実行委員会 企画協力：函館日中文化交流をすすめる会
主催団体より原稿が寄せられました。

1) 特別講演

＝シルクロードの心と会津の街づくり＝

五十嵐 大 祐 氏
会津・葵・西遊館・館長
(シルクロードコレクション)
会津若松復古会大肝煎り



2) 演奏会

＝シルクロードの調べ＝

于志敏 [琵琶] 1960年北京生れ(女)
[中阮] 北京放送音楽団団員

于志謙 [箏] 1962年北京生れ(男)
北京芸術団団員

※両演奏家は姉弟で1985年日本に留学、東京、大阪、京都、新潟、福岡、静岡、横浜で公演、NHKテレビ放送番組に出演している。

『函館ナショナルトラストを語る会』の活動の記録

- 1986 (S62) 2. 11 会発足。「シルクロードの調べ」開催。
- 3. 20 函館西部の「みなと」の活用を考えるシンポジウム共催。
- 6. 29 ハリストス聖教会修復資金チャリティー「ひとときの別れを惜しむ会」開催。
- 9. 10 「知床国有林伐採に関する要望書」を林野庁長官、環境庁長官、北見営林支局長へ送付。
- 10. 2 知床国有林択伐反対「知床支援チャリティー」「講演と音楽の夕べ」開催。

呼 応 す る 絃

植 竹 さ ち 子

主催された方の是非にとの誘いに久し振りの音楽会であった。五島軒という場所柄もあってか満場の華やきが眩しくて、自分ばかりが場ちがいに座しているようで暫くは落ち着かない心地であった。

予て琵琶という楽器の形の美しさにひかれていたのだけれど、間近く見る機会などなかったから、深紅の中国服に琵琶を抱いた伶人は絵を見るようであった。私の乏しい知識は正倉院宝物螺鈿紫檀五絃琵琶、筑前琵琶に代表される五絃又は四絃と知っていたから、その人の手にする中国琵琶がリュートに似た絃の置き方であること、中阮の楽器の紹介に「紀元前は当時琵琶と称していた」となってその種類も巾広いと認識を新にする。横浜の演奏会で中阮を破損したとのことで折角の機会にその音を聞くことが出来なくなって心残りであった。箏については一層知らなくて、同席した友人が「お箏の先生方がみえているわ」と言われ、心得て臨む人を羨ましく思い、于姉弟の「清微典雅で豊富多変」な演奏技術も私などの耳には聞かせ甲斐もないことであろう。山河・恋・春宵・台風・戦い、等々プログラムもよろしく、琵琶一張、箏一張の音量とは思えない弾く（ひく）というより弾じると聞こえる重厚さであった。慣れ慣れしさがなく耳にさわやかなのは為人なりであろうか。ほとんど言葉がなく、終始物静かな様子は好感がもてたけれど、何か言いたいのだろうか。私達の事をどう思うのだろうか。この人たちも私も銃は突き付けなかったけれど互に傷を負ったままなのではないか。琵琶曲「十面埋伏」そのまま。

やがて春が来て大陸西北部に黄砂の舞う季節、南に台風となってゆく様な箏曲「戦台風」、大きな風になって悲しい日の事は天空に舞い上ってしまえばよい。天山も絹の道も悠久にこの人たちのもの、寡黙の人々が千年一日の如く天に柔順に遊牧する聖域を汚してはならない。

2月19日、種子島から地球観測衛星の打上げ成功が伝えられ、「もも1号」と命名されたとか。私が中国という国を思う時なぜか「西王母」、つい先頃も親しい方に「篠田桃紅に心を傾けています」と話したのだけれど、その随想の中に『李白の詩にはまた「桃花流水杳然として去る」という一節もある。流水に浮いてはるかに去って行く桃の花びら、これもうす色ではな

く、くれないがいい、水に流れるときはもみじもからくれないが東洋の色だと思う』と。

会を主催された「ナショナルトラストを語る会」の方々は遠大にして崇高なまでの理想を掲げての御活躍ときく。私など頭のどこにもないことだけれど、自然をそのままにということ、李白の詩も通じない地球にならないよう念じて止まない。侵蝕輪廻ということがあるそうな、その砂の粒にも値しない私だから一日が「ただ静かに明け暮れるよう」祈るばかり。

前後するけれど、会津復古会の五十嵐大祐氏の講演は厚顔無恥に私心を申し上げれば、「囲む会」にされた方がより有意識ではなかったかと悔やまれる。シルクロードのこと、民芸の柳宗悦のこと、芹沢銈介、浜田庄司、そして板極道の棟方志功のこと、私には胸のおどる人々の話を会津若松の街で聞きたいと思う。曾て愚息がラサール高校在学中、会津若松に研修旅行があった。「今どきニューヨークならわかるけど何で会津若松なのかナ」と不平不満、その上夜半の連絡船で台風なみの大荒れ、船酔いと車中泊で市内見学、這々の体で帰宅、「二度と行く処でないヨ!!」とのことであった。学校がなぜ会津若松を選ばれたのか、いつか私もそれを慥めたいものと思いつづけている。



ナショナル・トラストは動いている

— 第4回世界会議に参加して —

明治大学工学部助手・NT会員 西村幸夫

1986年6月1日から15日間、イギリスでおこなわれた第四回ナショナル・トラスト世界会議に木原啓吉千葉大教授とともに出席して、百人近い参加者のひとりひとりと語り合ううちに、ナショナル・トラストはある意味で“若い”組織であることに気がついた。特にアジアではそうだ。インドのナショナル・トラスト〈Indian National Trust for Art & Cultural Heritage〉ができて2年半、マレーシアのトラスト〈Heritage of Malaysia Trust〉が3年目、フィリピンではまだ、わが国では、(財)観光資源保護財団が愛称を日本ナショナル・トラストと決めたのが、やや先輩格で1969年4月、17年前、民間の連絡組織ナショナル・トラストを進める全国の会が第一回の大会を開いたのがつい3年前なのである。

いわゆる先進諸国でも青年組は少なくない。カナダのトラストは17年目だということだし、ニュージーランドのトラスト〈Newzealand Historic Places Trust〉は1955年生まれで31歳、アメリカの有力なナショナル・トラスト〈The National Trust for Historic Preservation〉にしても、第二次大戦後間もない1947年の設立だから当年とって39歳、なのである。

会議には24ヶ国(ケイマン諸島のような属領や信託統治領等を含む)、40団体、83人が参加した。3年ごとにおこなわれている大会なのだが、4回目の今回は過去最大の規模になった、とイングランドのメンバーは胸を張った。トラストの仲間はこのほかヨーロッパからはフランスの大派遣団、ギリシアの建築家、オランダの美術史家、デンマークの国立博物館建造物部長、ポーランドで中世史の教鞭をとる大学教授など、それぞれの国のトラストを担っている人々が、西インド諸島からはバハマ、バミューダ、バルバドスのトラストの代表が顔をそろえた。驚くべきことにカリブ海には九つのナショナル・トラストがあるというのだ。このほか、オーストラリア、フィジー、アイルランド、それに日本などなど。

若いトラストは、したがって会員規模も比較的小さく(米ナショナル・トラストでさえ会員17万人程度だ)、保有している資産も多くない。しかしまた、所帯の小

さい身軽さから、様々なキャンペーン活動を積極的に展開しており、むしろ、運動するトラストという性格を色濃く持っているといつてよい。

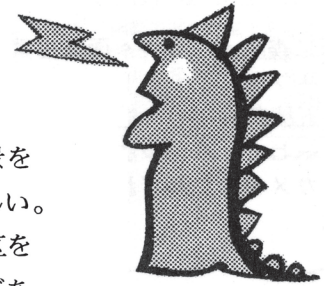
会議ではまた、トラストと地域社会のかかわり合いの問題や保全関連の法制度の問題、ボランティア活動のあり方など各種のテーマについて活発な討議がなされたが、なかで強く印象に残ったのは、近年イギリスのナショナル・トラスト本家が、保有する歴史的建造物を舞台とした環境学習プログラムを模索し始めている、ということである。歴史的な環境は、たんに過去の貴重な文化遺産として嘆息まじりに眺められるだけではなく、その環境それ自身が、特に子供たちに対して、強烈な教育上のインパクトを与える力を宿しているということに、トラスト関係者が気づき始めたのだ。古い建物を文字どおり舞台にして、いろんな芝居が演じられる、といったユニークな試みが始まっている。子供たちは古風な衣裳を身にまとい登場し、往時の生活をドラマの中に再現する。芝居を通して、かつての建物、住まい、コスチューム、食生活、階級社会、礼儀作法、音楽などを学ぶことができる。つまり歴史を総体として実感することができるのだ。「涙なしの歴史学習」といわれるゆえんだ。

環境を科目別にこま切れにカリキュラム化するのではなく、トータルなものとして把えていこうという新しい教育実践へと、英ナショナル・トラストは一步踏み出しているのだ。本家のナショナル・トラストも悠然と資産を保有しているだけではない。新しい活動領域を開拓しているのだ。トラストは動いている—これが今回の世界会議から筆者が感じた最大の印象だった。

次回、第5回の世界会議は3年後の秋、バミューダのナショナル・トラスト〈Bermuda National Trust〉がホストとなって開催されることが決まった。3年後日本を含めた世界のナショナル・トラストはどのくらい遠くまで歩んでいるのだろうか。今から楽しみだ。

(財)環境保護財団報211号より転載)

函館ワッショイ独り言



太田 誠一

高校の頃、山岳部にいた。冬山登山は禁止されていたが、冬山に憧れていた僕達は「訓練」をにし、千畳敷にカマボコテントを張った。函館山も立派なヤマであり、真冬の夜は痛い程寒かった。朝、誰よりも早くテントを出ると、リンと張った大気があり、気持ちが引き締まった。恵山の方から赤い色の朝がゆったりとやって来て、周囲に光を与えた。風景が命を得て、やわらかく微笑んでいる様だった。さらさらと踊り出した雪が、なぜか暖かく感じられた。その瞬間、僕は受験の現実も、好きだった女の子の事も完全に忘れて、ただスキトッテ在たような気がする。ああいうのが「無我の境地」というものなのかも知れない。その時初めて自分の住むハコダテが美しい土地だと感じた。忘れられないいい香りがした。その後、東京に出て北を想う瞬間、それは山や元町などの「香り付風景」だった。



記憶はいつも「場」と共にやってくる。その「場」に人がいてストーリーがある。だから「思い出」は場や風景を抜きには考えにくい。「思い出」は場や風景に対する「個々の想い」の現れではないだろうか。時代と共に色々な物が近代化するが、悪化すると、ちょびり辛いね。嬉しくなる様なステキな変化って難しいのね。人間的な生活って、今ドキ一体何だろうね…。

函館冬フェスティバルは基本的に風景や景観を生かして(演出して)冬を熱く呼吸するオマツリである。函館独特の風景や建物や歴史を主役にし、その中で各種のイベントやバザールを演出する。多くの人に出歩

いてもらい、函館の風景を再発見、新発見して欲しい。そして例えば、西部地区を歩いて、その中に音楽があったり、映画に出逢ったり、面白い品物に出っくわす。個人個人が自分の好きな物や、意外なものに出逢ってしまい、ボルテージを上げてくれると嬉しいね。そうして歩く事や参加する行為で、知らなかった人間に逢い、知らなかった自分を発見したりすると楽しいな。やはり何と云っても、人が在て生き生きすることが街創りに連なると思う。風景を生かすコトがイカス人を造り、人がイカス空間や時間を創る。ちなみに函館は、イカ酢も美味しい!!(ウフフ)

二回目を終え、多くの人が祭りに参加してくれた。しかし、ますますこれからだと思ふ。もちろん、色々な問題点も改めて出て来た。予算の生み出し方、使い方。本当の意味での民間活力(利益)のあり方。広告のあり方と形。ボランティアの意味。駐車場や交通機関。良き古さと新しさのバランス表現。郷土の歴史や文化遺産の企画展の充実。イベントの目玉(核)となるテーマの設定と具体化。等々。全ては、これからの函館の経済や文化に連がるキチンとしたビジョンが必要であり、行政サイドにも再考願いたい。ひとつのイベントが一過性の物でなく、次の活力へと向かうようなベクトルを皆

で少しずつでも創り上げていきたいものだ。青函博も間近に迫っている。否応無しに、大企業や大資本がやって来るだろう。だからこそ、お互いが理解しあって前向きな函館にできれば、イイネ(無理かしらん?)

時代は変わって行くけれど、どんな時代にも子供の心の中には自分が生きた土地や人や街が原風景として残るものだ。僕が高校の時、感じた「土地のカオリ」みたいなものをこれからの子供達や、もちろん僕達自身の為にも大切にしたい・ね・

頼むぜヨ!! ハコダテ詩!!

(元町倶楽部・一選手)

チャリティ・パーティに御協力商社(順不同)

棒二森屋・今井。函館西武。ホリタ・魚長食品・函館
 ローブウェイ・イトーヨーカドー。長崎屋・函館魚市場
 ・五稜郭タワー・第一食品・さいか・サッポロウエシマ
 コーヒー・ホテル法華クラブ・文雅堂・函館名産品商事
 ・カメラのたねざわ・平方亮三・太田比古象・おしゃれ
 館
 =ご支援ありがとうございます=

第9回 チャリティ・
 パーティ益金使途

1. 歴史的文化財保全基金の積立
2. 歴風会の事業推進に使途

昭和62年1月22日

事務局だより

◎62年1月22日 第9回函館の町並みを美しくする新春チャリティ・パーティを開催しました。今回は「街並み基金をつくる音楽と語らいの夕べ」を内容として、実行委員長にフィリップ・グロード神父さんになっていただき、新企画で実施しました。会員多数と市民の参加を得て楽しい夕べをすごしました。

第4回歴風文化賞として保存建物3件、再生保存建築物2件、団体1件(函館市立青柳小学校「やぐるま会」)原風景「石垣のある街」に決定、授賞いたしました。

◎62年2月7日 勉強会を開催いたしました。内容は「西ヨーロッパの町並」と題して室富夫先生をお迎えして有意義な勉強会でした。

会費納入のお願い

61年度未納の方、よろしくお願ひします。

郵便振替—函館630

又は拓銀昭通支店—026-293-407

宛先は、函館の歴史的風土を守る会

住所は、千代台町20-18です。

◀編集後記▶

*ご多用中、グロードさんほか原稿をお寄せ下さった方々へ心から御礼申します。執筆の皆様のご支援で会員各位へ会報をおとどけすることができました。会報「れきふう」では記事もさる事ながら写真が毎回オホメの対象となっています。本年1月9日道新夕刊に「歴史の舞台、函館の街並み永遠に」として函館西部地区の写真と記事が、道央圏では美しいカラー刷りで紹介されました。この紙面をつくったのが昨年迄、函館支社勤務であった宇野さんです。当会報の主たる写

真のいくつかは宇野さんのお世話によるものです。今回の歴風文化賞の写真も休暇で函館入りし1月の寒風に身をさらして撮って下さった宇野さんの作品です。改めて感謝の意を表します。

*1月20日市では62年度制定を目指し「函館市歴史的景観条例」(仮称)の委員会がスタートし38名の方々が各分野から選任されました。当会からも会長はじめ数名の方の名が見られます。条例化に対し市民は様々の意見を持っています。たとえば

(1)条例制定と同じレベルで大事にしてほしいことは、制定に至る迄のプロセスではないでしょうか……。コンクリートになった条例が或る日突然市民に知らされる様では困ります。コンクリートになる前の水、砂利セメントの状態の時にテマヒマかけて民意を問ひ市民の役割は何んなのかの自覚も含め世論喚起に努めていただきたいと思ひます。委員会では、どんな議論がなされたのか情報公開の先べんをつける努力も望みたい

(2)景観形成の大切な要素である新しい建築物へのデザイン勸奨等は条例の中で、どんな取り扱いがなされるのでしょうか。……。

(3)盛岡市では最初に自然景観保護条例があり、最終的に自然と歴史を一体と見なす環境保護条例が作りあげられていった様です。この思想は函館市でも大きな教訓になると考えますが……。

*会報に願乗寺縁起をお書き下さっていた明石信道先生が縁起の完結を見ず東京のご自宅でなくなられました。北洋資料館問題の折には市民運動の理論的指導者としてご苦勞下さいました。温かなお人柄、豊かな学識、魅力溢れる話題と話術、トキの過ぎるのを忘れお邪魔した、ありし日々を懐しく思ひ出します。函館に生まれ育ったことを誇りとなされ、日本の中で函館のまちを一番愛し続けた先生……。

心からご冥福をお祈りします。 合掌

田 尻